

アジアを 読む

3

「セル」 アジアのイスラム ネットワーク

「いたるところにセル細胞組織」が組み込まれている。あるイスラム団体トップの発言が耳の奥に残っている。

1998年10月中旬。当時、マレーシアのクアラ Lumpur で日本経済新聞の駐在記者をしていたそのころマレーシアでは権力闘争から副首相が解任・逮捕され、国内は騒然としていた。権力の座から追われた副首相は敬虔なイスラム教徒として知られ、以前に中国を訪問した時には明の時代に東南アジア、中近東への大航海を行った同じイスラム教徒の鄭和ゆかりの地にわざわざ足運んだほど。

その副首相の逮捕に反発した急進的なイスラム教徒が公然とマハティール政権打倒を叫び、これに対して政府は治

安維持法で副首相支持者を多数逮捕長い間、安定を誇ってきたマレーシアの政治、社会は大揺れに揺れていた。

治安当局がイスラム関係者への監視を強めていたが、白昼に地元マレー人で込み合う安ホテルのレストランで彼と会った。「セル」の起爆ボタンを誰かが押せばさらに混乱が深まりかねない。有力なイスラム組織を束ねる彼は人混みに注意をはらいながら小声でそう話した。「セル」という秘密じみた響きを持つことが、イスラム関係者の口からごく自然に出てきたことに不思議な感じを覚えたものだった。話を聞きながら、目に見えない「セル」が鎖のようにつながってうねっている様子が、頭のなかに浮かんだことを今でも記憶している。

「セル」ということは意識しながら東南アジアのイスラムをめぐる動きを追うと、興味深い現象が目につく。マレーシアの副首相が解任された時、タイ・チュアン政権のスリン外相がマハティール首相を暗に批判、インドネシアではイスラム団体がジャカルタのマレーシア大使館に抗議のデモをかけた。フィリピンでもマレーシアを非難する声があがった。

スリン氏はタイでは少数派、約300万人のイスラム教徒で、ハーバード大学でタイ南部のマレー・モスレムの研究」という論文で博士号を得た知識人である。インドネシアは世界最多のイスラム教徒を抱える、フィリピン南部には約400万人のイスラム教徒が住み、その一部は分離独立の旗を掲げてきた。

東南アジアのイスラム圏がほぼ同時に、マレーシア副首相の解任事件に反応したと言ってもよい。さながら、「セル」のネットワークが機能したかのようだった。

アジアのイスラム圏の近年の特徴は原理主義的な傾向を強めていることだ。マレーシアの一部の州では州政権を握るイスラム政党が、イスラム刑法を成立させ、世俗的な国づくりを進めてきた連邦政府と対立している。

インドネシアでもイスラム法の導入を主張する声が強まりつつある。最近で

モイスラム法に基づく国家運営を憲法に盛り込むよう求める数千人規模のデモがジャカルタで行われた。イスラム急進派と関連があるのか不明だが、イスラム教徒の多いタイ南部で連続爆弾事件が起きているのも、過激な「セル」の存在をおわせる気になる現象である。

インドネシアのスハルト元大統領は東南アジアのイスラム急進派を強権で抑えつけてきたといわれる。複雑な民族・宗教事情を抱える自国に過激な行動が飛び火するのを防ぐためだったという。特に通貨危機後にアジアで原理主義的な動きが強まってきたのは、スハルト体制の崩壊と関係があるのかもしれない。スハルト退陣後、域内から実質的なイスラムの重しがいなくなつたからである。

ウサマ・ビン・ラディン氏が東南アジアのイスラム圏にテロ組織「アルカイダ」の「セル」を張りめぐらしたのも、通貨危機による政情・社会不安、それに「盟主の不在」と無縁ではあるまい。

「イスラムはもともと異質なものの存在を認める寛容な宗教」マレーシアのイスラム理解研究所であり、アジアでは穏健なイスラム教徒が圧倒的に多い。イスラムの「セル」を悪用させてはならない。もうすぐ9月11日である。

(日経香港社社長 奥村幸広)